

## ハイデガーと他動詞性 副題

小田切 建太郎（日本学術振興会・京都大学）

ハイデガーにおける存在概念は日常的な語用から見ても通常の哲学的語用から見ても特異な意味を担っているといえる。彼のテキストに見いだされるその様々な相貌は単に〈存在の多義性〉という常套語に還元されえない次元のものであるその一方で、しかしそのあまりの〈単純さ〉は、安易な分析を峻拒し、それについて語ろうとする者をして時にハイデガーの言葉の繰り返しに終始させることもまた同時に確かであろう。ひとはしばしばこのような困難を前に為すところなくひたすら立ち尽くすのである。このような状況のなかで本発表は、彼の語る存在の特異な〈動態〉に注目してその解明を試みることにしたい。このような観点からの先行研究として、小田切建太郎の『中動態・地平・竈——ハイデガーの存在の思索をめぐる精神的現象学』（法政大学出版局、2018年）がある。小田切は主に中動態（Medium）の観点から現象学における媒体性の問題との連関において関心（Sorge）ないし実存、そして存在そのもの、エルアイクニスの動態の解明を行っている。だが、他方で存在についてのハイデガー自身の記述およびそれに関する解釈には目立たないながらときおり思い出したかのように他動詞性が顔を出すことも確かである。本発表が注目し取りあげたいのはこの点である。

英語の *be* 動詞と同様にドイツ語の *sein* も通常辞書的には自動詞として説明される。ところがこれらの動詞が時としてハイデガーにより他動詞（ないし能動的）と称されることがある。それは例えば『哲学への寄与論考』（1936-38. GA 65, S. 296）においてであり、「形而上学存在神論的体制」（1956/57. GA 11, S. 70 f.）においてであり、あるいは1968年のゼミナール（GA 15, S. 325）においてである。また、それ以上にエルアイクニスの動詞形エルアイクネンが（通常再帰用法でしか使われないにもかかわらず）ハイデガーでは他動詞的（能動的）に用いられることも、知られている。しかしいずれの文脈にあっても、その他動詞性の含意するところが具体的に説明されるということはない。当然ながら、世界ないし存在者の存在を被制作性とみなし、その背後に神ないし神＝存在による創造（制作）を見るというモデルから、存在＝創造（制作）の他動詞性を述べているなどということではないとするなら、ハイデガーにおいて他動詞性とはいったいなにを意味しているのだろうか？論じる内容としては措くとしても、晩年の M.メルロ＝ポンティが遺作『見えるものと見えないもの』（1964）でハイデガーの動詞的な *Wesen* の他動詞性を明示することからして、一見して些細な他動詞性という指摘が含みもつ射程は思いのほか遠くまで伸びているのかもしれない。

うえに挙げたテキストのなかで、ハイデガーがマイスター・エックハルトの „Istic-heit“（GA 15, 325）を引用して、「神は存在である *Gott ist Sein*」「存在は神である *Sein ist Gott*」の „ist“ を他動詞的・能動的だと述べる。その際ハイデガーはエックハルトの文献への指示なしに記憶に基づいて引用する。そして、この命題がヘーゲル的な「思弁的命題」だと指摘する（言及されるのは『精神現象学』（1807）の *Vorrede* ではなく、『論理学』（1812-1816）である）。矛盾するもの同士の否定作用のうちに現れる肯定が看取するのが、思弁的命題である。そこでは主語はそれ自体単独的ないし固定的なものであることを否定され、主語 - 述語関係は弁証法的な流動的生成発展の過程を表わすものとなる。「神は存在である」という命題では、存在は神の本質となり、また「存在は神である」という命題が可能となりその意味が問われうるものとなる。

だが、ヘーゲルは命題のなかの „ist“ を他動詞として明示しているわけではない。先行研究によれば、エックハルトのそれも他動詞だとされているわけではない。それはあくまでハイデガーの解釈によるものである。

とはいえ、ハイデガーが言及しているわけではないが、„ist“ を明確に他動詞として提示している哲学者として、シェリングがいる。Walter Schulz によればシェリングは同一哲学の時点ですでに汎神論に関して、「*deus est res conctas = Gott kann alle Dinge*」という表現を使用している。これはスピノザにおける自由な主体の不在への批判を表明しつつそれを乗り越えようとするものである。『自由論』（1809）年でもスピノザ批判につづく箇所、コブラの意味に関する誤解を指摘し（SW VII, 341 f.）、後の箇所、„ist“ を強調し（SW VII, 358）、Buchheim によってその他動性が指摘されている。より後期の『啓示の哲学への導入』（1842/43）では、あらゆる可能性、思考、神概念にすら先行する絶対的なプリウスとしての事実存在の「存在そのもの *αὐτὸ τὸ ὄν*」が「動詞的」（SW XIII, 162）と呼ばれる。動詞的とは他動詞的ということであり、これは他動詞的 „können“ を意味する。これは『神話の哲学』（1842）では、現実の世界の形成を契機とする神の自己形成過程における存在可能のポテンツの存在への移行（*Übergang*）の動態にあたる。この根源的な（非）存在ないし存在可能は、ある意味で神でありながら、神を現実存在する神とするものとして、神の主体である。つまり他動詞的に〈存在は神である *das Sein ist Gott*）とすることができる。

本発表では主にこうしたシェリングにおける他動詞性を手がかりにして、ハイデガーにおける存在の他動詞性について考察したい。手順としては、まず、ハイデガーにおける存在者と存在に関する表現をめぐる変容を辿る。『存在と時間』（1927）や形而上学期（1927-1930）におけるハイデガーは、〈存在者は存在する *das Seiende ist*〉が、〈存在は存在せず *das Sein ist nicht*〉、むしろ（後期のそれとは異なる意味で）〈存在はある *es gibt das Sein*〉といった表現をたびたび用いる。しかし、思索の変遷のなかで、本来的に存在する（*ist*）のは存在であり、そうであるならばある意味で存在者は存在しない（*ist*）のではないかと自問するようになる。またハイデガーは、ギリシア語の *εἶναι* の現在分詞 *ὄν* が存在と存在者の両方を表わす二義性を持つことに注意するようになる。また、ここには前期の存在論的差異に対する自己批判とともに、より根源的な存在と存在者の区別（*Unterschied*）ないし二重襲（*Zwiefalt*）と呼ばれる一性（*Einheit*）そのものへの思索の変容が読み取れる。こうした一性において存在がある（*ist*）の „ist“ は存在者を存在せしめる（*sein lassen*）非形而上学的な根拠の働き、存在者への移行（*Übergang*）ないし転移（*Überkommnis*）として理解される。このような後期ハイデガーの存在の思索を、さらに上述の（できればヘーゲルの思弁的命題に関する議論とも併せて）シェリングの思想を比較考察しながら、両者の思索の近さと遠さを、存在の他動性を軸に考察して見たい。